

老いの受容についての一検討 —シルバー川柳に対する笑いから—

伊藤 董

人はある年齢になると、「老い」を自覚する出来事に遭遇する。老いを自覚するきっかけは個人により様々であるが、否定的な意味合いのことが多い印象を受ける。しかし、様々な属性を自分自身のアイデンティティとして受け入れることは、心身の健康や生活環境への適応を保つ上で不可欠である。高齢期に至り、様々なものの喪失に直面してもなお、それを受け入れることが重要なのである。社会老年学の研究史上においては、老年期への適応状態の良さを表す言葉として「サクセスフル・エイジング」が用いられてきた。先行研究を概観すると、老いの受容・老いへの適応については、様々な視点から検討されてきたことがわかる。

本研究では、老いの受容・老いへの適応について、シルバー川柳を素材として、ユーモアという視点から検討した。近年、社会の高齢化を背景に流行しているシルバー川柳には、作者の老いに対する態度が反映していると予想される。特に、川柳に表現することによってユーモアに転換していることから、シルバー川柳で扱われている内容は、高齢者の老いに対する態度の中でも、受容している側面が現れていることが推測される。そこで本研究では、シルバー川柳に表出されたユーモアから、老いの受容について検討することを目的とした。

研究1では、シルバー川柳 295 句を分類し、高齢者の老いの関心について「加齢による変化(身体・認知・容姿)」、「対人関係・社会的立場の変化」、「健康への関心」、「死・余命の意識」、「長生きの実感」、「孤独」の6個のカテゴリを抽出した。そして、シルバー川柳に見られる内容が、高齢者の老いに対する関心と重なっていることを示唆した。

研究2では、研究1において分類したシルバー川柳をもとに、老いの受容尺度を作成し、信頼性と妥当性を検証した。また、作成した老いの受容尺度と基本属性との関連を検討した。155 名の高齢者(平均年齢 78.85 歳)に対して質問紙調査を実施した。調査内容は、基本属性として年齢、性別、主観的健康状態、主観的経済状況、子の有無、孫の有無、ここ数カ月の死別経験、川柳に対してどの程度笑うことができるかの評価、高齢者の主観的幸福感の尺度として PGC モラールスケール、老いの自覚の程度、高齢者の精神的健康の尺度として WHO-5 であった。作成した老いの受容尺度は、十分な信頼性が得られた。また、十分な妥当性は得られなかったが、一定程度の妥当性が確認された。さらに、高齢者は、老いを自覚すると主観的幸福感が下がり、精神的健康が悪くなるが、老いの自覚が高くても低くても老いを受容することは精神的健康に良い影響を与えることが示された。

本研究の限界として、本研究で作成した老いの受容尺度には内容の偏りがあること、高齢者のシルバー川柳に対する理解の程度を考慮しなければならないことが考えられる。しかし、本研究で示した、ユーモアの視点からの老いの受容の検討は、今後、高齢者の精神的健康や老いの受容、老いへの適応という概念を考察していくうえで有用であると言える。今後詳細な検討を経て、ユーモアという視点が高齢者の老いの受容の測定に用いられ、川柳などの柔軟なテキストが質問項目として使用されることは、ますます進行していく高齢社会において、老いの不安を多少なりとも払拭しサクセスフル・エイジングを実現する一助となるであろう。(臨床死生学・老年行動学)